茨城大学教育実践研究 35(2016), 57-69

大正期の子どもの絵に関する研究（２）

――『啓助日記』における挿絵を対象にして――

山　田　秀　平* ・ 向　野　康　江**

(2016 年 10 月 28 日受理)

A Study of Child Painting During the Taisho Era (1912-1926) (2)

—To Target Art Work in “The Diary of Keisuke”—

Shuhei YAMADA and Yasue KOHNO

キーワード：『骨肉』、向野啓助、日記、挿絵、家庭教育、図画教育、向野堅一

前稿「大正期の子どもの絵に関する研究（1)」に引き続き、これまでの美術教育史研究であまり注目されてこなかった家庭での子どもの図画活動に着目するという趣旨の下、大正 4 年の『啓助日記』内の挿絵の紹介及び分析を行った。本稿では、前稿で取り扱った「想画」以外の 16 点（「写生」「模写」「地図」「その他」）を取り上げている。また、前項において問題提起した点について継続して着目し、16 点を分析している。結果、「写生」や「地図」の一部挿絵に「想画」と同時期に同じような変化、「立体的な描写への移行」の片鱗を見出すことができた。

今後はこれらの変化が、『骨肉』においても同様のものか、啓助が『骨肉』に投稿した作品と比較する研究が求められる。また、今後はこの研究を元に『骨肉』『日記』双方の相違点共通点及び特徴を探求する研究姿勢が求められる。大正期の子どもが家庭で描いた絵の一例を紹介及び分析することで、今後の研究の基礎資料を構築すること、及び、『啓助日記』の資料的活用の方向性を検討することを本節論の目的としている。

はじめに

本拙論は、「大正期の子どもの絵に関する研究（１）」の続きである。（１）では、美術教育研究史において、家庭内での美術教育について殆ど注目されてこなかったことを背景に、先ず現段階で取り上げられる資料として『骨肉』と『啓助日記』をあげ、先行研究[1)]を紹介した。そこから主に大正 4 年『啓助日記』の挿絵 30 点の内「想画」に分類される 14 点について論じた。本稿では、挿絵 30 点の内 (1) の残り 16 点「写生」「模写」「地図」「その他」を取り上げ、その紹介と分析を行う。

*茨城大学教育学研究科　　**茨城大学教育学部

分類	図番号	題材	対象	日付	日記の文との関係
想画	①	映画の登場人物	人	1月2日	○
	②	似顔絵（モデル不明）	人	1月27日	△
	③	似顔絵（福島大将）	人	2月9日	○
	④	映画のシーン	人＋α	1月2日	○
	⑤	馬に乗る福島大将	人＋α	2月9日	○
	⑥	風景①	建物	2月7日	△
	⑦	風景②	建物	2月11日	○
	⑧	風景③	建物	3月24日	△
	⑨	風景④	山	2月17日	○
	⑩	風景⑥	川	3月22日	○
	⑪	風景⑦	遊んでいる様子	1月24日	○
	⑫	風景⑤	遊びで作った炭鉱	3月12日	○
	⑬	風景⑧	遊んでいる様子	3月25日	○
	⑭	風景⑨	花火	4月20日	○
写生	〔1〕	静物①	筆	1月23日	○
	〔2〕	静物②	西洋紙と消しゴム	2月10日	○
	〔3〕	静物③	「しんかき」	2月12日	○
	〔4〕	静物④	万年筆	4月1日	○
	〔5〕	静物⑤	本	3月15日	△
	〔6〕	静物⑥	有二の作った工作物	3月11日	○
	〔7〕	信子がもらった人形	人形	3月14日	○
模写	〔8〕	風景⑧	船と海	1月28日	×
	〔9〕	風景⑨	灯台と海	2月1日	×
地図	〔10〕	地図①	本屋の場所	1月5日	○
	〔11〕	地図②	火事が起きた場所	1月26日	○
	〔12〕	地図③	あさりを取った場所	3月22日	○
	〔13〕	地図④	不明	3月31日	△
その他	〔14〕	落書き①	不明	2月18日	△
	〔15〕	落書き②	不明	3月4日	△
	〔16〕	落書き③	不明	3月7日	△

表1　大正4年『啓助日記』第1号　挿絵　分類表

特に3月24日に描かれた挿絵のみが遠近感を意識した立体的な描き方で描かれている。その他、「想画」という特性上、記憶に残っているものを中心に描いており、自分の姿を描き入れていないことを特徴として見出した。16点の特徴は何か、また、全30点において見出すことができる特徴は何か、今後の『啓助日記』の資料的活用の方向性を検討することを目的とする。

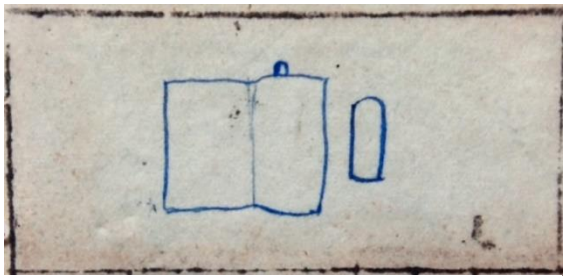
挿絵における写生画

まず、挿絵の中で「想画」の次に多い「写生画」に分類される挿絵を取り上げる（表1）[2)]。

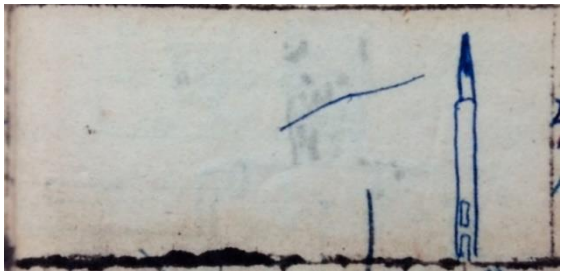
文房具を描いた写生画

図〔1〕～〔4〕は文房具を描いた挿絵である。「想画」と違い、実際に買ったもの使っているものを描いている。家の中にある物のため、実物を見ながら描いている可能性が高い。

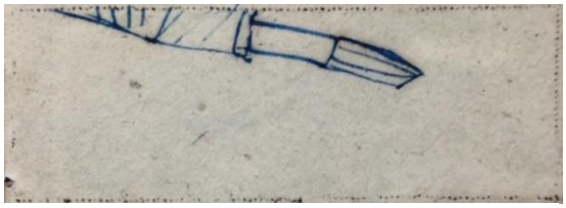
図〔1〕　「静物①」1 月 23 日



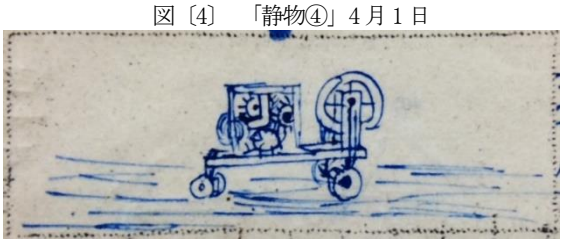
図〔2〕　「静物②」2 月 10 日



図〔3〕　「静物③」2 月 12 日



図〔4〕　「静物④」4 月 1 日



図〔5〕　「静物⑥」3 月 11 日

1 月 23 日の日記には「筆を買った。金三銭也」と記されている。図〔1〕はその筆を描いた絵であろう。2 月 10 日の日記には「一、今日は何事も何かった。一、ただ西洋紙とごむを買った。西洋紙一銭五厘。ゴム五厘だけであった」と記されている。図〔2〕はその西洋紙とゴム（消しゴム）を描いた絵か。どちらも対象の全体を描いている。図〔2〕が、対象を上から垂直平行に描いているのに対し、図〔1〕は斜めに描いている。

2 月 12 日の日記には「一、今日はしんかきを買った。一、金二銭也」と記されている。図〔3〕はその「しんかき」を描いた絵であろう。

4 月 1 日の日記には「万年筆を造る」と記されている。図〔4〕はその万年筆を描いた絵か。図〔3〕・〔4〕は図〔1〕・〔2〕と違い、対象の全体が描かれていない。図〔3〕は対象を垂直に描いており、「しんかき」の下方が切れている。図〔4〕は対象を斜めに描いていて、持ち手（万年筆の胴）が半分近く切れているという珍しい構図である。別の紙に全体を描き、切り貼りして日記に張り付けているわけではない。初めからこの向きで描き始め、持ち手が切れた状態で描かれている。可能性として、ペン先から描き始めたため、持ち手が描き切れなかった、という事象が考えられる。万年筆の全体より、自分で造った万年筆のペン先の形を描きたかったのかもしれない。

文房具を描いた挿絵（挿絵）図〔1〕～〔4〕の構図はそれぞれ違い、同じ向きで描かれている絵がない。

文房具以外の写生画

3 月 11 日の日記には「一、晋兄機械を造る」と記されている。図〔5〕はその機械を描いた挿絵らしい。機械仕掛けで走行するものらしい。有二も自身の日記に同じ機械の絵を描いている（図 1）。両者を比べてみると、啓助の方が細部まで描いていることが分かる。啓助の描いた図〔5〕の方が比較的まっすぐな線を引くことができている。対

し、図１はタッチの軽い柔らかい線で簡素に描かれている。また、啓助は機械が走る床面に漫画のスピード線のような線を描いており、機械が走っている様子を表現している。走行中を思い出して描いた絵にしては機械の描写が詳細であるため、この線は止まっている機械を写生した後に描き加えられたものと推測する。

先行研究〔D〕（ 註１）参照）15 頁に「図 11『少年』」として、『少年』に掲載されている漫画が取り上げられている。その漫画の最後のコマ（3 コマ目）が図 2[3]である。そのコマ（図 2）において、左の子どもが犬に引きずられている。それに加え、少年の右手と両足の下に斜めの線が平行に何本か引かれている。この雑誌は明治 44 年のものである。啓助が図〔5〕を描く以前にこのような効果線の表現が漫画に使われていたということから分かる。先行研究〔D〕では『骨肉』に漫画表現が使われた絵が多数掲載されていることから、子ども達が日常的に漫画に触れていた可能性を指摘している。図〔5〕の床面に引かれた線は、そのような家庭状況の中、漫画表現と効果線の役割を理解した啓助が描いたスピード線だと推測する。

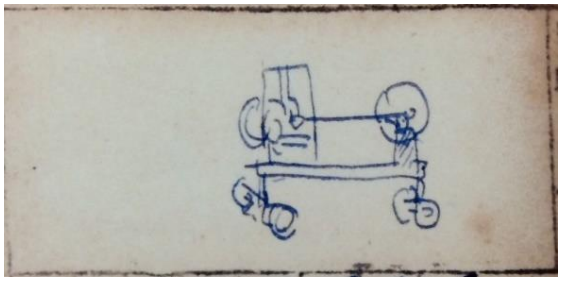


図１ 有二が 3 月 12 日に描いた絵

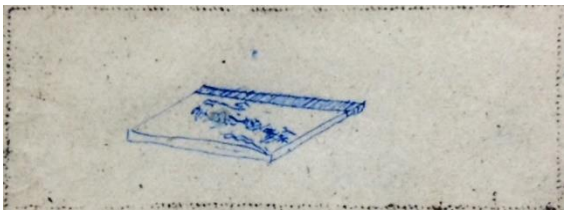
図２　先行研究〔D〕15 頁掲載

3 月 14 日の日記には「一、信子人形を買ひてもろひしにすぐ様足をおる。有二兄それをつぐ」と記されている。図〔6〕は信子が買ってもらったという人形を描いた挿絵か。おそらくなまはげの人形である。向かって右側に描かれている胴の下から伸びている楕円上の部分が折れた足なのか。胴体などと違って線のみで描かれており、変な方向へ曲がっているように見える。

3 月 15 日の日記には「一、学校で博文社が五年の本を売りに来た。一、私は買はなかった」と記されている。同日の日記には図〔7〕の絵が描かれている。次の日の日記には「一、学校よりかへり博文社へ読本と修身書と買ひに行った」と書いてある。図〔7〕は 16 日に描かれた絵か。それとも、15 日、やはり買えばよかったと思い、本の絵を描いたのか。もし後者なら、思い出して描いた想画ということになる。文房具を描いた図〔2〕などと違い、斜めに置き、俯瞰の視点で描かれている。

『尋常小学　新定画帖　第四学年　教師用』[4]には図 3[5]の図が、『尋常小学　毛筆画帖　第四学年　児童用[6]』には図 4[7]・5[8]の図が掲載されている。『新訂画帖』には「第四課　景色の透視図」

図〔6〕　「静物⑦」3 月 14 日



図〔7〕　「静物⑤」3 月 15 日

として、初期より遠近法を意識した説明がなされている。図３はその延長の課題である「第二十課器物の透視図」である。『毛筆画帖』では図４の「第三図」のような、平行垂直に器物を描いている手本が「第四図　三方」「第五図　手桶」「第六図　帽子」と続く。しばらくして「第十一図　箱」で図５の手本のように斜めに置き俯瞰でみた遠近法の描き方を示す絵の手本が登場する。図〔1〕～〔4〕と図〔7〕の間には、知識として遠近法を学んだ者の変化が絵に現れている様に感じられる。

３月 24 日の挿絵（図⑧）において、遠近感を意識した形で建物が立体的に描かれている。図〔7〕が描かれているのは 3 月 15 日。３月中に描かれた図〔7〕と図⑧のようなりったお的な描き方は、少なくとも 2 月中に描かれた挿絵には認められない描き方である。

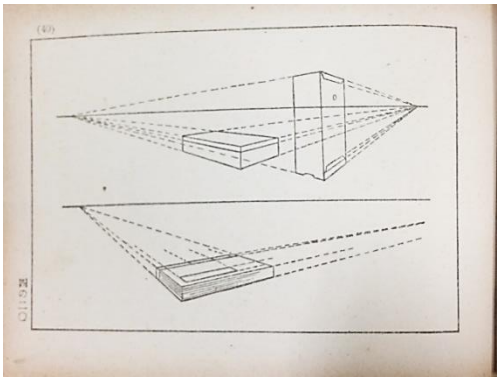


図３ 『新定画帖』40 頁

図⑧ 「 風景（3)」 3 月 24 日

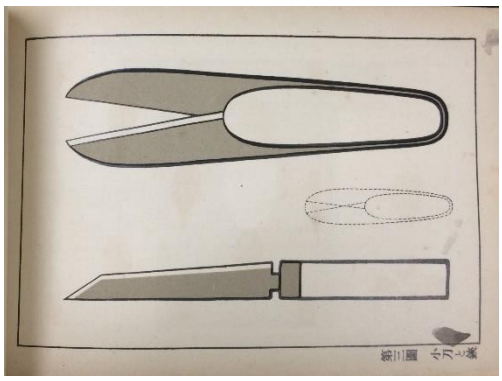


図４ 『毛筆画帖』「第三図　小刀と鋏」

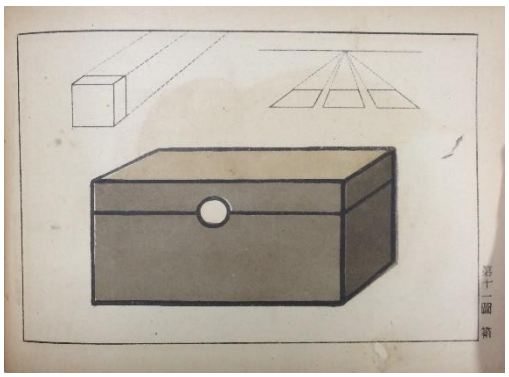
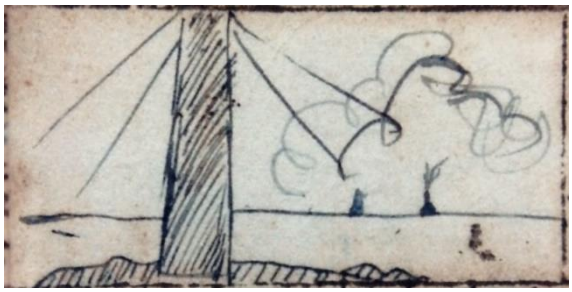


図５ 『毛筆画帖』「第十一図　箱」

挿絵における模写



図〔9〕 「風景⑨」2 月 1 日

盲腸炎の日に描いた風景

２月 1 日の日記には「一、今日も学校は休んだ」と記されている。啓助は１月 29 日に盲腸炎にかかり、4、5 日間学校を休んでいる。そんな中２月１日の日記に描かれた絵が図〔9〕である。この絵は何かの絵の模写であると推測される。盲腸炎で外に出られないため、外で見た風景を描いた絵とは考えにくい。また、縦横いっぱいに描いていること、前景と後景を描いていることな

どは「想画」図⑨・⑩[9]の特徴と異なる。このため、図〔9〕は、写生画や想画とは考えにくい。

図〔9〕の描写には、奥行きがはっきりしている、という特徴を指摘することができる。このよう

図⑨ 「風景（4)」2 月 17 日

図⑩ 「風景（5)」3 月 22 日

な描写は啓助の挿絵では珍しい。図⑧では、立体を見ている視点がバラバラで、立方体の線の向きが消失点に向かっておらず、それぞれの建物の大きさが整理されていない。しかし、図〔9〕ははっきり手前の建造物と奥の船の位置関係が意識され、大きさの違いによって遠近感がしっかり表現されている。一から啓助が描いたとは考えにくい。

2 月 2 日「一、今日は父が元気なら起きてそろばんをおせと云はれたのて起きた」と記されており、、このころには体調が回復していたことが伺える。よって、図〔9〕は、体調の回復した啓助が、家にあった雑誌の挿絵などを模写した絵であると推測することができる。

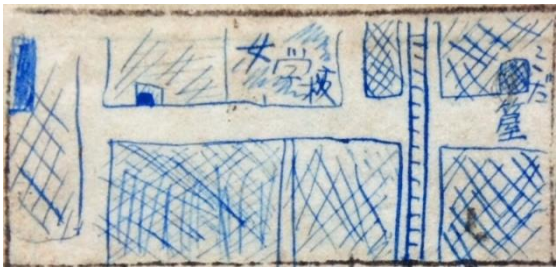
図〔8〕 「風景⑧」1 月 28 日

図〔8〕は、盲腸炎にかかって学校を休む前日の 28 日に描かれている挿絵である。当初、日記の記述とも関係ないこと、28 日もお腹が痛かったことから図〔9〕同様模写した挿絵であると推測していた。しかし、図〔8〕の波の表現には、手探りで取り組んでいる様子が感じられ、何かを模写した絵とは考えにくい。

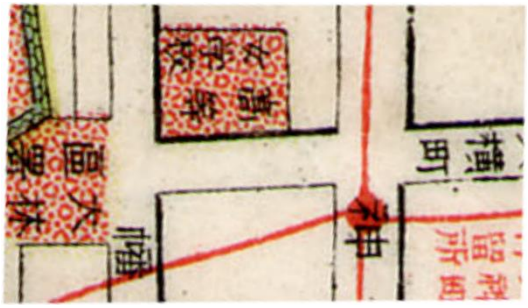
大名尋常小学校は海岸に近く、博多港と福岡港の間に位置していた（図 14 参照)。啓助が住んでいた因幡町は大名尋常小学校の近くであった。そして、北九州市には、当時すべての船が集まっていた門司港があった。長崎には軍艦の整備ができる長崎造船所があった。門司から長崎に向かう軍艦は博多港の周辺の海を通っていたという。啓助にとって、軍艦が海岸を進む風景は日常的だったはずである。啓助は軍艦を度々目にしていたと推測する。前日の 27 日「八龍のおいしゃん」にドイツ軍の提督の話を聞いて軍艦などに更に興味をもったことも考えられる。さらに、同月 26 日・27 日はどちらも挿絵を描いているため、28 日に描かれている図〔8〕も 27 日に描かれた挿絵である可能性も高い。また、描かれている戦艦は、シルエットから敷島型戦艦「三笠」[10]及び「朝日」[11]や「河内型戦艦 1 番艦」[12]であると推測できる。「三笠」は日本海、「河内型戦艦 1 番艦」は九州近くの黄海や東シナ海の警備にあたっていた戦艦であるため、その可能性も視野に入れることができる。つまり、啓助が、「八龍のおいしゃん」の話に刺激井されたか何かで、日ごろ目にしていた軍艦の姿を日記に描き残した、というのがいまのところの考えられる可能性である。

挿絵における地図

日記に描かれた挿絵の中には以下の図〔10〕～〔13〕のような地図の体裁をとっている挿絵も存在する。日記の記述と共に当時の地図と比較してみよう。



図〔10〕　「地図①」1 月 5 日

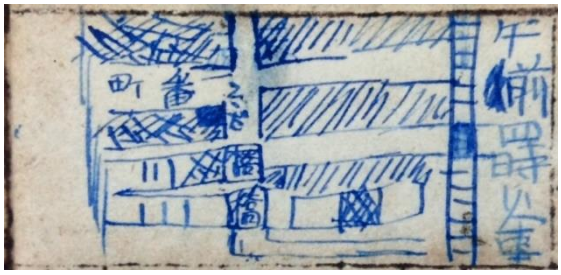


図⑨

場所を地図で表した挿絵

本を買いに行った場所

1 月 5 日の日記には「夜本を晋兄と元生兄が買いに行かれた。銭が足らなかったためかへって来て銭をもらって買ひに行かれた。」と記されている。その日描かれた地図（図〔10〕）には「ここだ」と書かれている。図〔10〕は本屋の場所を示した地図である。また、図〔10〕中央上方に「女学校」と書いてある。本屋と女学校の間に描かれている梯子のようなものは路面電車の線路かもしれない。以上のことを踏まえると、図〔10〕の場所は図⑨[13]の場所を描いたものだと推測される。全体地図（図 14）[14]の❶に当たる場所である。図〔10〕の、女学校前の通りの左端に突き当り（T 字路）がある事も一致する。（地図上の赤い線は路面電車の路線を表している。



図〔11〕　「地図②」1 月 26 日

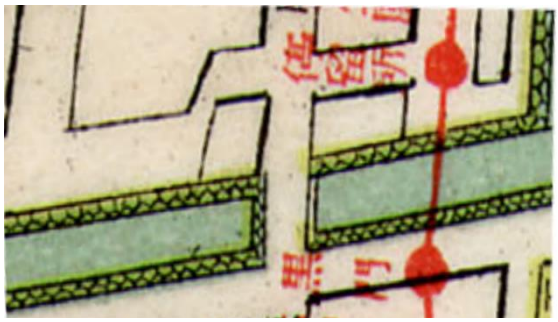
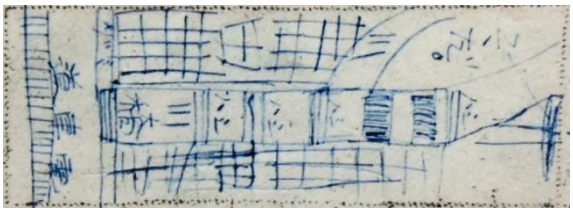


図 10

火事のあった場所

1 月 26 日の日記には「午前四時火事あり一番町の自てん車屋です。父、客人は、有二兄、晋兄、なおみ、信子、隆三さん達は火事見に行かれた」と記されている。図〔11〕の地図には「ここだ」と書かれている。図〔11〕は一番町で起きた火事の場所を描いた地図らしい。図〔11〕には、図〔10〕と同様の位置（右側）に路面電車の線路が描かれている。また、左下に「川」と「橋」がそれぞれ 2 つ描かれている。以上の事を踏まえると、図〔11〕の場所は図 10[15]の場所を描いたものだと推測される。全体地図（図 14）の❷に当たる場所である（縮尺がずれているため、図〔11〕の全体を図 10 で示せてはいない）。図 10 には橋が 2 本描かれていないが、橋の上方左側に平行四辺形と長方形で区切られた場所が存在する。図〔11〕

では、上側の橋の左側に台形が付随しており、斜線で中が埋められている。これが図 10 の平行四辺形の部分に相当するのではないかと推測する。また、図 10 の左側が二番町、更に左が三番町に当たる場所である（図 14 参照）ため、図 10 の部分が一番町にあたると推測する（この地域の他に一番町と記されているところはない）。



図〔12〕 「地図③」3 月 22 日

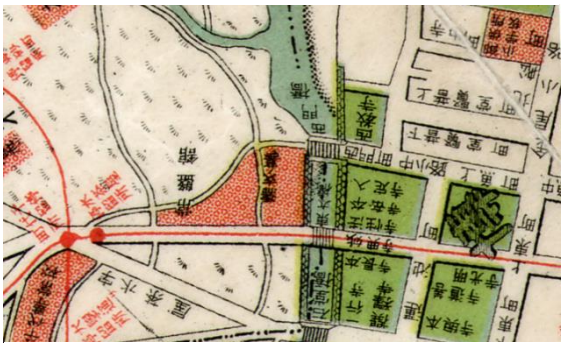
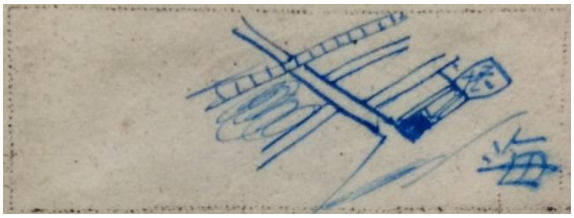


図 11

せり摘み

3 月 22 日の日記には「春李皇霊祭。川島の祖母さんとしげしゃんと信ちゃんと有しゃんとせりをつみに行った。かへりあさじがひをとった。」と記されている。「せり」は川岸などに生える植物のことである。図〔12〕には右上に「川」と「ここだ。」と書かれている。図〔12〕の場所は図 11[16] の場所（図⑩で描かれている場所）を描いたものだと推測される。全体地図（図 14）の❸に当たる場所である。

図 11 では、電車が川を横切っているが、図〔12〕では横切っていない。しかし、全体地図の図 14 をみると、川と平行に走っている線路がほとんど存在しないことが確認でき、このような場所は限られてくる。啓助が図〔12〕で描いている橋は横断歩道の様に縦の線が間をあけて何本か引かれている。これは鉄橋上部の梁を表した線か、橋の上を通る線路を表している線だと推測する。また、図 11 では、川の上方右側に川岸が描かれている。図〔12〕で描かれている「ここだ」の部分だと推測する。



図〔13〕 「地図④」3 月 31 日

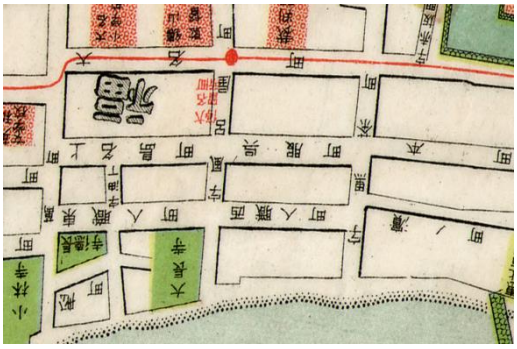


図 12

野田先生の家

3 月 31 日の日記には「岩城さんとわたなべさんにさけをだされた。野田先生の内に手紙をもって行った」と記されている。おそらく、図〔13〕は野田先生の家を示した地図だと思われる。しかし、図〔13〕ははっきりした場所が見つけられなかった。ただ、全体地図の中で、路面電車が海岸付近を通っているところは珍しい。唯一、路面電車が海岸沿いを通っていて住宅がありそうな場所が図 12[17] の場所である。全体地図（図 14）の❹に当たる場所である。ただ、図 12 の地図には、図〔13〕のように、向かって右上に道が 2 本、向かって左下に 1 本通っているような道は確認できない。

この頃、図 14 のような大きな地図だけでなく、ポ

ストカードサイズの地図（図 13）も大量に出回っていた。啓助が図〔10〕から〔13〕の地図を何も見ずに描いたとは考えにくい。尋常小学 4 年生（10 歳）が、訪れた場所を、真上から見た地図のように、何も見ずに描くのは難しいことと推測する。しかし、図 14 のようなちゃんとした地図を見て描いた地図にしては図〔10〕から〔13〕の挿絵は地図として正確性に欠けるように感じる。

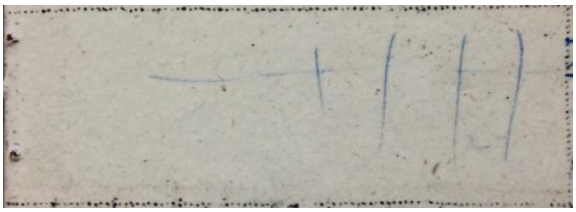
図 13 のポストカードサイズの地図は非常に簡易的で、道は建物と建物の境界線と同化している。そこで、図〔10〕から〔13〕の挿絵は、図 13 のような簡易的な地図と自分の記憶の両方を頼りにしながら描いたものだと推測する。

図 13　当時の福岡県の地図（ポストカード）

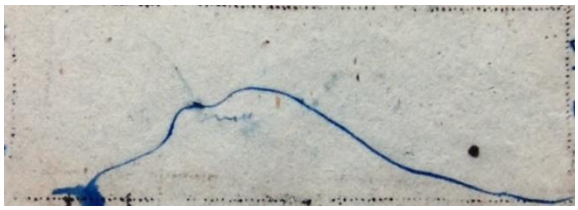
文房具などを上から見て平面的に描くのは、物が小さく、実際に上から見ることができるため、真上から描くことはあまり難しくない。しかし、建物はなかなか上から見ることはできないため、真上から見た視点で描くことは困難なことだと考える。小学生がどれほど自分の歩く町や道を真上から見た視点で地図のように描写できるか、というのは興味深い点である。おそらくその能力には、物をどれだけ具体的にイメージできるか、角度を変えてみた時の形がイメージできるか、という能力に関わっていると考える。

図〔10〕～〔12〕が上から見た地図を描いているのに対して、図〔13〕は斜めに見たように描いている。消失点や遠近感が表されているほど道の幅に違いはないが、横と縦の線で描かれていた地図が、図〔13〕では斜めの線で描かれている。図〔13〕が描かれたのは 3 月 31 日。3 月 15 日には図〔7〕のノートを立体的に斜めの構図で描いている。それまで平面的であった建物が立体的に描かれている図⑧は 3 月 24 日の挿絵である。3 月のこの時期を境に啓助の物の見方に変化があったことを予感させる。

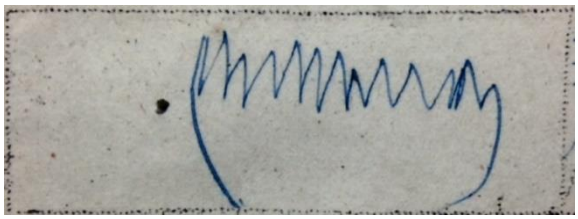
挿絵におけるその他の描画



図〔15〕　「落書き②」3 月 4 日



図〔14〕　「落書き①」2 月 18 日



図〔16〕　「落書き③」3 月 7 日

落書き

日記に描かれた絵の中で、何を描いたのかわからない挿絵が 3 枚存在する。

図〔15〕は図〔6〕のように、ペンのインクの量や幅を確認・調整している線の様に思われるが、縦と横の線が存在するなど、何かを描こうとしたようにも見える。3 月 4 日の日記には「今日は明日の事を森先生が云はれた。私達は早良山に祭り愛宕山にも祭るのであった。」と書いてある。関係性は不明である。

図〔14〕もインクなどの調整のために引いた線の可能性がある。しかし、一筆でグネグネしている線は図〔14〕以外には確認できない。山の様にも見えるが、図⑨のように木は描かれていない。図〔14〕が描かれている 2 月 18 日の日記には「一、今日は学校でしゅうごうかいさんがあった。一、かへって信子が口びるをけがをした。一、又晋兄と元生兄とのかさをもって住吉学校に行った。一、かへりに住吉の学校のきまりの洋紙をかった。金二銭」と記されている。関係性は不明である。

図〔16〕も何を描いた絵かわからない。花の花弁の様にも見える。図〔16〕が描かれている 3 月 7 日の日記には「一、今日も猿飛佐助をよんだ。とうゝよんでしまった。一、昼筆を買ひに行った。金三銭母のが金七銭」と記されている。やはり日記との関係性及び何を描いたか不明である。インクの調整のために線を折り返して描いていたらギザギザを描くのが面白くなって図〔16〕のような形に落ち着いた、といったところか。3 枚の中では図〔16〕が 1 番何かの形に近い。しかし、何を意味しているのかは不明である。啓助にとってこれらはどんな意味をもっていたのであろうか。

おわりに

本稿では、これまでの美術教育史研究の中で注目されてこなかった家庭内での活動に焦点を当てた「大正期の子どもの絵に関する研究（1)」で取り上げ切らなかった残りの 16 点の紹介及び分析、30 点の挿絵すべてを取り上げることで見出される『啓助日記』の挿絵の特徴と、今後の研究のための基礎資料の構築、『啓助日記』の資料的活用方法を確認することを目的とした。

まず、「写実」に分類される挿絵を分析した。2 月中までは、買った文房具を真上あるいは横、斜

めから描いている。それらの挿絵は斜めから描いていても、その成果物に遠近感を感じることはできない。しかし、3 月 15 日に描かれている本（教科書）を写生した挿絵では、対象を斜め上から捉え、『尋常小学　新定画帖　第四学年　教師用[18]』40 頁で指南されている方法に似た形で立体的に描かれている。

次に、「模写」に分類される挿絵を分析した。いわゆる臨画に近いものである。「模写」だと分類しているのは、推測の域をでない。2 月 1 日の図〔9〕が模写だと判断する理由には本論で述たことに加え、立体的に描けるようになるのは 3 月から、という推測を前提にしている。逆に、その前提を抜きにして、2 で述べる分析のみで図〔9〕が模写だと仮定すれば、図 9 が立体的な空間を意識するきっかけになった可能性も考えることができる。『骨肉』における模写作品についてオリジナル（源流）追跡を行っているように、これらの挿絵についてもそのような調査が今後必要かもしれない。しかし、模写と思われる絵が『骨肉』に比べ日記内にはほとんど存在しないことも確かである。

「地図」に分類される挿絵では、図〔13〕において、それまで垂直平行の線で描いていた地図を斜めの線で描いていることは、特に注目される。それは図〔13〕を描いているのが 3 月 31 日であるからか、この変化を、「写生」において縦横の線で描いていた文房具が、図〔7〕で奥行きを意識した描写に変化したのと同時期と見ることができる。この変化は「想画」における図⑧への変化とも時期を同じくしている。

以上の分析から、筆者が「大正期の子どもの絵に関する研究（1）」において見出した、大正 4 年の『啓助日記』3 月を境に起きた啓助の絵の変化の可能性を、「写生」「地図」にも見出すことができる。また、これら 16 点の挿絵には、「想画」同様（図⑪、⑬を除き）啓助自身の姿及び人物が描かれた挿絵は存在しなかった。日記の挿絵に自分が描かれていないというのは、現代的な感覚からすれば、あまり一般的ではない感覚の様に感じられる。啓助の事象が珍しいか、もしくはこの時代の児童を代表する感覚かどうか、このデータをもとにその他の資料と比較検討することが今後可能であると同時に、さらなる究明が求められる。

では、啓助は、『骨肉』及び学校ではどのような絵を描いていたのか。啓助は『骨肉』に兄弟の中でも一番多く学校で描いた図画を投稿している。それら『骨肉』内に掲載されている啓助作の学校の図画、その他の啓助作品にも上記の変化と共通する変化が認められるかもしれない。また、上記の変化の原因が『骨肉』内の作品から見出せるかもしれない。向野家の家庭教育のもう一つの重要な取り組みであった『骨肉』ではどのような図画・美術活動が行われていたのか。これは今後の研究課題である。

注

1)『骨肉』の研究において、図画作品を対象とした先行研究は以下の 5 点である。

A．向野康江「1900年代の家庭教育における図画教育の成果」（INSEA2007年アジア大会論文集（英語版）、2007年）

B．西部こずえ「『骨肉』における漫画」（茨城大学大学院教育学研究科、2006年）

C．向野　康江『子どものための美術教育』（弦書房、2010年）

D．千葉　麻伊「骨肉における自由画の源流について」（茨城大学教育学部学校教育教員養成課程、2011年）

E．皆川　真理「大正期の子どもによる手作り雑誌『骨肉』所収の図画の源流を求めて」（茨城大学教育学部学校教育教員養成課

程、2015年)

また、啓助個人に言及した先行研究として、以下２点がある。

F．斎藤太郎「一九一七（大正六）年向野兄弟の朝鮮・満州（ママ）旅行―『骨肉』・大正期家庭教育をうかがわせる手づくり雑誌（二）(『桜花学園大学人文学部研究紀要』第 11 号、2010 年)

G．齋藤太郎「正月を父と過ごす日々―大正四年の啓助日記から―」向野堅一顕彰会研究部『向野堅一顕彰会会報』(第二号、2011 年)

2) 図番号①～⑭は「大正期の子どもの絵に関する研究(1)」にて取り上げている図番号である。便宜上本稿でも表内のみに図番号を記している。

3) 西部前掲論文，15 頁

4) 文部省『尋常小学　新定画帖　第四学年　教師用』(日本書籍，1910 年)

5) 文部省前掲書，40 頁

6) 文部省『尋常小学　毛筆画帖　第四学年　児童用』(東京書籍，1910 年)

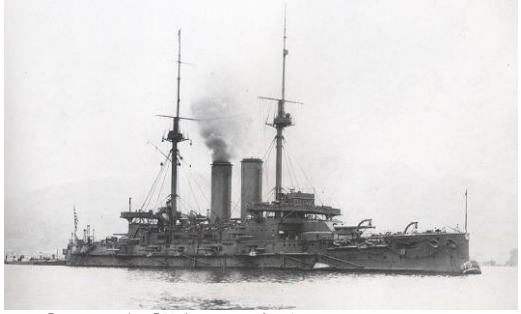
7) 同上

8) 同上

9) 「大正期の子どもの絵に関する研究(1)」にて紹介している図⑩。

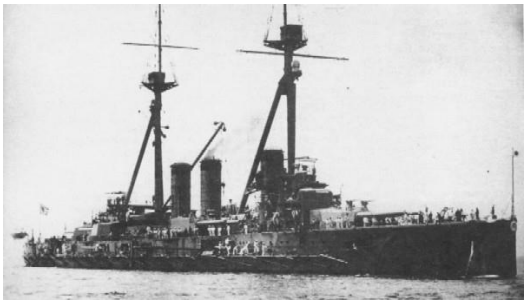
10) 「三笠」：大日本帝国海軍の前弩級戦艦で、敷島型戦艦の四番艦。明治 35（1902）年より就役、大正 12（1923）年除籍となった前弩級戦艦。大正 3（1914）年、第一次世界大戦に際し、日本海などで警備活動にあたる（戦争初期)。

同じく大日本帝国海軍の前弩級戦艦で、敷島型戦艦の「敷島」は下の写真の通り、「三笠」の煙突が 2 本であるのに対して、3 本立っている。



左：「三笠」，右「敷島」の写真（https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%89%E7%AC%A0_(%E6%88%A6%E8%89%A6)：左)
(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%95%B7%E5%B3%B6%E5%9E%8B%E6%88%A6%E8%89%A6：右)

11) 「朝日」：大日本帝国海軍の前弩級戦艦で、敷島型戦艦の二番艦。明治 33（1900）年竣工、昭和 17（1942）年除籍。「三笠」と同じく煙突が 2 本立っている。



左：「朝日」，右「河内」
(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%9D%E6%97%A5_(%E6%88%A6%E8%89%A6)：左)
(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B2%B3%E5%86%85_(%E6%88%A6%E8%89%A6)#cite_note-.E4.B8.BB.E8.A6.81.E8.89.A6.E8.89.87.E8.89.A6.E6.AD.B4.E8.A1.A8p2-5：右)

12) 「河内」大日本帝国海軍の河内型戦艦 1 番艦で大正 3（1914）年就役、大正 7（1918）年除籍。第一次世界大戦に参戦、東シナ海や黄海の警備に当たる。「三笠」「朝日」のように煙突が日本たっている。

13) 地理研究会「最新実測福岡市街全図」(弘陽堂書店，1914 年)（福岡県立図書館所蔵)

14) 同上

15) 同上

16) 同上

17) 同上

18) 文部省『尋常小学　新定画帖　第四学年　教師用』(日本書籍，1910 年) 40 頁

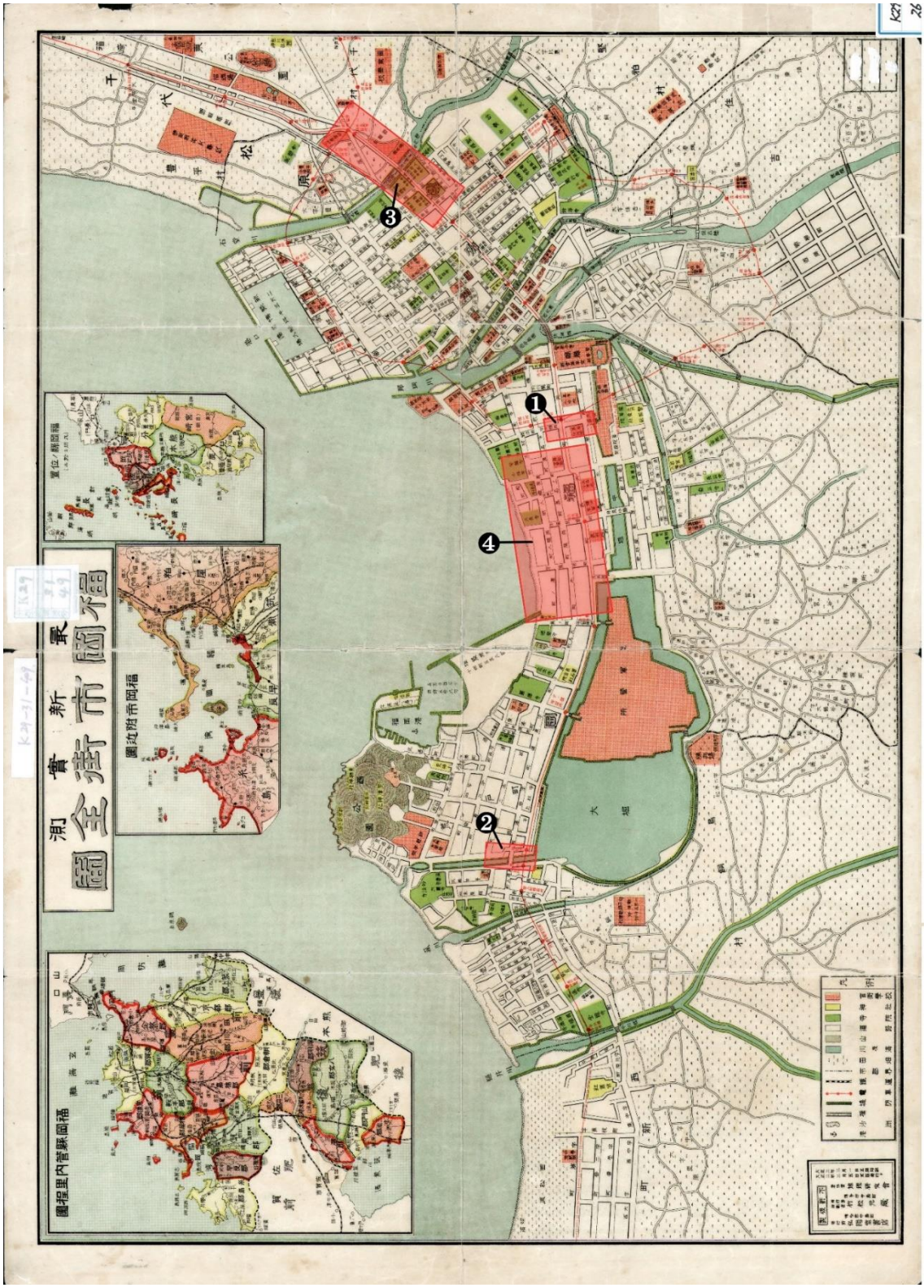



図 14「最新実測福岡市街地図」（大正 3 年）